

# 序章

## 色彩と投影

第1節 色彩と感情・情緒 8

第2節 色彩と象徴 10

第3節 色彩を用いる性格検査 13

(1) 色彩象徴テスト (CST) 13

(2) ロールシャッハ・テスト 14

(3) カラー・ピラミッド・テスト (CPT) 14

(4) その他 14

色彩とパーソナリティとの間には、密接な関係があります。単純すぎる例ですが、例えば赤をより好む人はより活動的であるとか、青をより好む人はより鎮静的な人であるといったような。そのような関係性を通して、人は内的なパーソナリティの有り様を色彩選択行動の中に投影します。即ち、より活動的な人は数ある色彩刺激の中から赤系統色に対してより選好的な反応を示し、より鎮静的な人は青系統色に対してより選好的な反応を示します。色彩を用いる性格検査が成り立つのは、基底的にこうしたメカニズムがあるからこそと言えるでしょう。

それでは、色彩とパーソナリティとの間には、広く一般的に、どのような関係性があるのでしょうか。最も主要なものとして、2点あげられます。1つは色彩とパーソナリティとの間にある心理・生理的な関係、2つは色彩とパーソナリティとの間にある象徴的な関係です。色彩を手がかりに性格診断を行うには、これらの点が明らかにされていなければなりません。カラー・ピラミッド・テストの理論と実際に入る前に、本序章ではまず、その基本的なところを述べておきたいと思えます。

なお、本書読者の方々にあつては、以前から定評があり、すでに世に広まっているたくさんの好著、例えば『色彩心理の話』（西川好夫 1976）、『色彩の美学』（塚田敢 1978）、『色彩とパーソナリティ』（松岡武 1983）、『色を心で見る』（千々岩英彰 1984）、『色と形の深層心理』（岩井寛 1986）・・・等々から、色彩とパーソナリティの関係についてかなりの知識をお持ちかと思えます。ここでは、屋上屋を架す愚は避けて、カラー・ピラミッド・テストに入門するための必要最小限の基礎的知識に絞って、簡単なお復習<sup>きり</sup>いをする程度に留めることにいたします。

## 第1節 色彩と感情・情緒

さて、人間の生活は、初め、人間の制御を超える二つの要素によって、全き支配を受けていました。一つは夜の暗黒(闇)であり、二つは昼の白光(陽光)です。夜は人の活動を停止させて睡りの時に導き、昼は再び活動を可能にする環境を与えて賦活します。まだ灯りをもつことのできなかつた私たちの祖先は、数えるこ

ともかなわぬ永い間にわたって、単純にこのパターンを繰り返していました。人間の生生活活動を基底的に制約する夜と昼、一方は闇(暗)、他方は光(明)によってもたらされます。こうして私たち人間は、自ずとダーク調の色彩刺激によって鎮まりと受動へ、ライト調の色彩刺激によって活気と能動へと誘導されるようになりました。これは、まさに生理的レベルで基礎づけられ、自律神経系の弛緩と緊張に関係します。

次いで、夜の闇は鎮まりと安らぎに導きます。しかし、闇も深まって星明かりや月明かりもない全き暗闇(暗黒)ともなれば、どこから外敵が攻めてくるかも分からない、危険で不安な世界がつくり出されます。やがて、暗黒は不安や恐怖とも関わり、それを体感させるようにもなります。暗闇はまた、外敵や危険から身を隠し、己を守ることを可能にします。もろもろのしがらみから逃れさせる暗闇(黒)の世界はこうして「防衛」や「隠蔽」の色ともなります。一方、白光の昼は、活動の世界です。そして活動のさらなる行方は、燃えさかる「陽」の下<sup>もと</sup>で、また煌々と燃えたぎる「火」のほり<sup>り</sup>で高まります。田畑を耕し、獣を追い、雄叫びを上げて敵を滅ぼします。かくして、体感される色彩群、赤や黄や橙は活動と結ばれる色となり、さらには情熱や衝動や攻撃心をかき立てる色、またそれを象徴する色ともなったのです。

このように、赤も黒も黄や橙も長い歴史の中で、感情的・情緒的に、特有の意味合い(感情価)を持つようになりました。これは極めて自然な成り行きの中で粛々と育まれたもので、極めて強固な心理・生理的基礎のもとに、人種・民族・性別を超えて高い客観性と普遍性を持ち、人はこの関係性からめったなことでは放れることはできません。それ故、人は赤やその系統色を見ると活動エネルギーがかき立てられ、何やら行動的になり、黒やダーク調の色を見ると、活動を抑止し、あるいは何やら不安になって、我が身を守りたくなります。逆の関係もまた、普遍的で、エネルギー水準が高く、あるいは行動的な人は赤系統色をより好み、服飾や調度品その他身の回りの物にそれを重点的に用いるでしょうし、不安や防衛心が強い人は、やはり服飾や調度品その他に黒系統色を巧みに配置するでしょう。

こうした色彩と感情・情緒との心理・生理的レベルの関係性は、ここで述べた以外の色彩についても、同じように言えるはずですが。どのような色彩も、長い人類の歴史を通して、それぞれの色の属性としての感情価を持っています。色彩を介在させる性格検査を用いるに際して、私たちはまずこの点を確認しておかなければなりません。

表序-1は、調査・実験の方法は多岐にわたって異なりますが、パーソナリティと感情・情緒との関係についての様々な研究結果を、我が国における「色彩とパーソナリティ」研究の先駆者、松岡武先生が纏めたものです。これにより、色彩と感情・情緒との間には、日常的な経験からもほぼ納得のいく一定の関係性があることが分かります。

こうして、服飾選びや描画活動など、様々な色彩選択行動の中で、活力的な人あるいは活力に満ちて行動したい人は赤系統色への選好、安らぎの中にある人あるいは安らぎを求める人は青系統色への選好を示して、自ずと心の中を映し出すのです。

表序-1 色と色彩との関係(松岡 武, 1983)

属性種別		感情の性質	色の例	感情の性質
色相	暖色	・暖かい ・積極的 ・活動的	赤	激情・怒り・歡喜・活力的・興奮
			黄赤	喜び・はしゃぎ・活発さ・元氣
			黄	快活・明朗・愉快・活動的・元氣
	中性色	・中庸 ・平靜 ・平凡	緑	安らぎ・くつろぎ・平靜・若々しさ
			紫	嚴肅・優婉・神秘・不安・やさしさ
			青緑	安息・涼しさ・憂鬱
寒色	・冷たい ・消極的 ・沈靜的	青	落ち着き・淋しさ・悲哀・深遠・沈靜	
		青紫	神秘・崇高・孤独	
		白	純粹・清々しさ	
明度	明	・陽氣 ・明朗	白	純粹・清々しさ
	中	・落ち着き	灰	落ち着き・抑鬱
	暗	・陰氣 ・重厚	黒	陰鬱・不安・いかめしい
彩度	高	・新鮮 ・発らつ	朱	熱烈・激しさ・情熱
	中	・くつろぎ ・温和	ピンク	愛らしさ・やさしさ
	低	・渋み ・落ち着き	茶	落ち着き

## 第2節 色彩と象徴

色彩を媒介として投影されるパーソナリティの側面は、第一義的には、各色彩

の属性として生じる感情や情緒です。しかし、ときには、私たちが所属する社会・文化・国家が持っている色彩についての集団的、共通的な概念的意味が映し出されることがあります。それが、色彩の持つ象徴的意味合いです。

色彩の象徴的意味は、色彩の感情価から始まります。例えば、白を見てみましょう。白は前頁の表によって分かりますように、色であって色でない、何ものも混じらない純粹さや何ものにも侵されない清々しい気持ちを誘発する色彩です。この色感と感情がやがてよごれ無き清純の意味を重ね合わせ、さらに無垢なるもの、純潔なるものを表すものと合体するに至るのは、けだし必然の成り行きと思われれます。こうして、「白」は純潔を象徴し、白無垢の花嫁衣装となり、穢れを落として次の世に旅立つ白装束として用いられます。また、白は何ものも無い虚心の心とも通じます。そこで白旗を立て、敵に向かい、休戦や平和を呼びかけ、あるいは降伏を表明するシンボルとなりました。

どの色彩も、この白の場合と同じように、感情的・情緒的意味合いから派生したいくつかの象徴的意味を持っています。その内容はどれも各色彩がもたらす元々の感情内容に由来しているため、例えば赤で言うなら喜び・情熱・活気、青で言うなら沈着・冷静・知性といった感情そのものあるいはそれらを抽象化した観念であり、色彩と象徴との繋がりには容易に連想することができます。しかし、すべてがそうとも限りません。元々の色が多義的で捉えどころが難しい場合には、象徴の内容も多岐にわたり、それがなかなか困難な場合があります。紫がその典型です。

紫は、赤と青が混じり合っできる色彩です。混じり気を感じさせない他の色と異なり、どこか錯節する奥行きがあり、捉えどころがありません。活動を投影する赤と抑制を投影する青とが混じり合うために、不安や葛藤など人間心理の微妙な琴線と触れあい、それが故にまた、何か妖しげに人を引き込む色調と相俟って神秘さ、優雅さ、高貴さといった情操感に誘<sup>いざな</sup>います。それかあらぬか、我が国では奈良時代に聖徳太子らが策定した冠位十二階の制度で紫色が最高位を示威するものとされて以来、紫は気高さの象徴となり、神官の袴、僧侶の法衣なども身分の高さを紫色で示します。そして私たちも、それを感じ、認識します。

この紫を巧みに織り交ぜれば、恋も愛も一段と優美の極みに誘われるのか、万葉和歌集には例えば額田王の

「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

それへの返歌とされる大海人皇子の

「<sup>むらさき</sup>紫草の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆえに我れ恋ひめやも」

そのほか、たくさんの「むらさき歌」が見られます。

また建物にこの色名を冠すれば、実際にこの色をもって具現的に示すよりもむしろなお、現実の色彩を超えて象徴化され、荘厳感と神秘感がいや増します。例えば、中国の王宮・紫禁城や、京都御所の紫宸殿がそれです。

しかし、ところ変われば品変わるといのでしょうか。ヨーロッパでは、紫は不穏な混色の感情価から始まり、ネガティブな意味合いを持つことも少なくありません。ローマ・カトリック教会では、紫は「苦悩」と「憂愁」の意味となり、オランダの学生や知識人の間では、「欺瞞」「毒物」「不幸」「盗み」等を意味する色となっています（松岡 1983）。

色彩が人にもたらす観念や感情は、最初色彩の生理的意味を原点に生まれ、やがて社会的・文化的な共通認識の下に一定の象徴的な意味を持つようになります。これは民族、人種、国家など文化的背景の違いによって多様であり、それらの間には極めて対立的、背反的に際立つものもけっして珍しくはありません。さらにこうした色彩象徴の特異性は、文化を超え集団を越えて個人レベルになると、いっそう際立ちます。岩井寛(1986)は、そうした事例を数多く挙げて、深層心理的に色彩の象徴性を分析しています。例えば、紫色について、死に至る人間は次第に紫がかってやがて暗紫色に変わる、これを生から死への方向転換と捉え、不安や恐怖や果ては狂気を象徴する源であるとし、紫だけを用いて自画像を描いた統合失調症の患者の事例を引いています。また、赤を全く常識的に「情熱の起爆剤」としながらも、死に直結する血しぶきやすべてを焼き滅ぼす火焰とのイメージの一体化から逃れられない、いわば「赤恐怖症」とも言うべき病者の例を挙げて、赤を狂気の色とする特殊な象徴性を記述しています。

「色彩と象徴」について、社会・集団のレベル、社会・文化間レベル、そして個

人的レベルで見てきました。表序-2は、その色彩と象徴について纏められたもの、かなり以前の研究資料ですが、これを超える資料は寡聞にしてまだ知りません。

表序-2 色彩による象徴（佐藤巨宏，1951）

	象徴される意味									
赤	喜悦	情熱	愛情	革命	熱心	活気	誠心	幼稚	野蛮	卑俗
橙	陽気	華美	積極	元気	躍動	喜楽	温情	我儘		
黄	希望	快活	愉快	発展	光明	歓喜	明快	平和	軽薄	冷淡
緑	安息	慰安	平静	知性	親愛	着実	公平	理想	純情	柔和
青	沈静	沈着	深遠	消極	悠久	瞑想	真実	冷静	寂寥	
紫	優美	神秘	不安	永遠	高貴	温厚	優婉	優雅	軽率	
白	歓喜	明快	潔白	純真	神聖	素朴	清楚	純潔	清浄	信仰
黒	静寂	悲哀	絶望	沈黙	暗黒	堅実	不正	厳肅	寂寞	罪悪

このように、色彩と象徴の観点から色彩の意味を問えば、その奥深さは、まさに感動的です。また、驚異的です。ここに思いを留めて、再び色彩とパーソナリティの関連に心を移すと、それがどれほど深遠なことであるか、興味つきないものがあります。

### 第3節 色彩を用いる性格検査

色彩を媒介にしてパーソナリティを解釈しようとする性格検査は、いくつかあります。本書の読者の方々には関心のあることと思われまので、ここで簡単にご紹介することにいたします。なお、最初の3つは、性格検査の作成・標準化の過程あるいは実施・研究の過程で性格検査の科学性を裏付ける「信頼性」と「妥当性」（第2章参照）の検討が行われているもの、その他のものは、今後にそれが持ち越されているものです。

#### (1) 色彩象徴テスト（CST）

不安・運命・郷愁・愛など41の刺激語を提示し、それを16種類の色彩表の中から感覚的に最もふさわしいと思える色彩に対応させ、その結果からパーソナリティ診断を行うものです。1952年に小保内虎夫と松岡武によって創られ、その後松岡武によって完成されたものです。日本の心理学者によって創案された唯一の独創的色彩性格検査です。参考文献として、『色彩象徴テストの原理と方法』（松岡武 1964）、『色彩とパーソナリティ』（松岡武 1983）があります。

## (2) ロールシャッハ・テスト

インクを白紙に垂らして二つ折りして開くと、曖昧模様の左右対称の図版ができます。そのようにしてできた図版(10枚)の中の色彩部分に何を見、どのように取り上げたか(色彩優位か、形態優位か)など、色彩に関わる反応をその他の様々な反応カテゴリーと有機的に結びつけてパーソナリティ診断を行うものです。なお、色彩反応部分とその診断部分は、パーソナリティ診断上大きな役割を担っていますが、このテストのすべてを占めるものではありませんので、ロールシャッハ・テストを単なる色彩性格検査と呼ぶのは語弊があります。『新・心理診断法』（片口安史 1974）ほか、今日までたくさんの専門書と啓蒙書が出されています。

## (3) カラー・ピラミッド・テスト (CPT)

美醜あるいは好嫌の対比的条件の下に、24あるいは14の色相から成る1辺2.5cmの色彩チップで5段15枠のピラミッド図形を作成させ、色彩選択と形態構造の2つの次元から迫ってパーソナリティ診断を行うものです。初めフィスターが創案し公開したものを、1951年以降、ハイス等が改良・発展させました。「色彩ピラミッドテスト」『井村恒郎監修 臨床心理検査法』（川久保芳彦 1963a）、『カラー・ピラミッド性格検査法』（宗内敦・江川玟成ほか 1983）があります。

## (4) その他

1) *The Lüscher Color Test* (Lüscher, M. 1969)

邦訳：『ルッシャー博士のカラー心理テスト』（佐野寛 1993）



- 2) *Analyze Your Personality through Color* (Munzert, A. W. 1980)  
邦訳：『色による性格テスト』（松野武 1983）
- 3) *Color in Your World* (Birren, F. 1978)  
邦訳：『好きな色嫌いな色の性格判断テスト』（佐藤邦夫 2003）